

【暗証聖句】

ヨハネの黙示録/ 14 章 13 節

「また、わたしは天からこう告げる声を聞いた。「書き記せ。『今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである』と。」「霊」も言う。「然り。彼らは労苦を解かれて、安らぎを得る。その行いが報われるからである。」

【日・愚かな金持ち】

イエス様は食欲に注意するように教えられた後、一つのたとえ話を話されました。「ある金持ちの畑が豊作だった」と言って始まる、愚かな金持ちのたとえとして知られている物語です。あまりの豊作のおかげで、しばらく仕事をしなくても食べていけるだけの蓄えができます。そこで金持ちは、自分自身に向かってこう言うのです。

「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」(ルカ 12 章 19 節)と。

ところが、彼は自分の命が今夜限りであることを知りませんでした。主は、この金持ちに向かって、「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか」と言われたのでした。キリストの実物教訓 P232 に次のように書かれてあります。

「この人の目標は、滅んで行く獣の目標より高くはなかった。彼は、神も天国も未来の生命もないかのように、自分の持つものはすべて自分の物で、神や人にはなんの負うところもないかのように生活していた。」

愚かな金持ちの過ちは、財産も命もすべて自分の物であると思いこんでいたこと。ゆえに、自分のことだけを考えて生きていたこと。そして、神も天国も未来の生命もないかのように生きていたことでした。そのような人は刹那的で、ただ楽しければよく、それは滅びゆく獣以下の人生の目標しかないとエレン・ホワイトは言っています。

愚かな金持ちは、怠け者であったとは書かれておりません。不誠実であったとも書かれておりません。しかし利己的でした。神様から頂いたものをまるで自分のものであるかのように生きていました。ところで、クリスチャンではない人がこのたとえ話を讀んだら、どう思うでしょうか。私たちと同じように、この男は愚かな人だと思うことでしょう。しかし、それは財産や命を自分の物だと思っていたからではありません。それを使わないで死ぬことになるからです。私たちの中にも同じような思いはないでしょうか。

【月・何一つ携えて行くことができず】

詩編 49 編 18 節「死ぬときは、何ひとつ携えて行くことができず、名誉が彼の後を追って墓に下るわけでもない。」

詩編 39 編 12 節「あなたに罪を責められ、懲らしめられて、人の欲望など虫けらのようについでます。ああ、人は皆、空しい。」

テモテへの手紙一 6 章 6、7 節「もともと、信心は、満ち足りることを知る者には、大きな利得の道です。なぜならば、わたしたちは、何も持たずに世に生まれ、世を去るときは何も持って行くことができないからです。」

ヤコブの手紙 4 章 14 節「あなたがたには自分の命がどうなるか、明日のことは分からないのです。あなたがたは、わずかの間現れて、やがて消えて行く霧にすぎません。」

コヘレトの言葉 2 章 21、22 節「知恵と知識と才能を尽くして労苦した結果を、まったく労苦しなかった者に遺産として与えなければならないのか。これまた空しく大いに不幸なことだ。まことに、人間が太陽の下で心の苦しみに耐え、労苦してみても何になろう。」

これらの聖句を読むといくつかのことがはっきりわかります。① 死ぬときは人は何を持って行けない。② 自分が苦勞して得た財産は他の人のものになる。③ 欲望に生きる人生は結局空しい。④ 命はあっという間 ⑤ 与えられたもので満足すること

これらのことは、誰にでもわかることです。人生の優先順位を間違えないようにしなければならないし、空しいことのために生きるのではなく、意味あることに生きるべきだと思わされます。残して行く財産がある場合は、大切な家族のために残すだけでなく、すべてのものは主の物であることを考えれば、神様のご用のために残していくことも大切でしょう。

【火・個人的必要から始める】

箴言 27 章 23、24 節「あなたの羊の様子をよく知っておけ。群れに心を向けよ。財産はとこしえに永らえるものではなく、冠も代々に伝わるものではない。」

羊は生き物ですから、注意深くみていかないと、死んでしまったり、逃げてしまったりするかもしれません。しかし、きちんと管理すれば、赤ちゃんを産んで増えていくことでしょう。これはその家の財産が増えることを意味していました。これを現代に置き換えると、私たちが与えられた財産をきちんと管理しなければならないということ教えていると理解することができます。それでも、財産は永遠に持ち続けることはできません。死んだ後それをどうするのかについてもきちんと考える必要があります。

ある方が犬を飼うかどうか迷っていました。それは自分の年齢を考えると、最後まで面倒を見ることが出来るかどうか不安だったからです。すると、近くの動物病院の先生が、「心配いりませんよ、もしものときは、私が最後までちゃんと面倒をみてあげますから」と言ってくださり、その言葉で安心して犬を飼うことができたということでした。

自分が死んだあとのことは、元気なうちしておく必要があります。相続に関することは、自分だけでなく、相続人もちゃんとわかるように正式な遺言を残しておくことが大切です。相続人がいない場合や教会に献金したいという場合も、後から問題が発生することのないように、きちんとそれがわかるように正式な書面に残しておくようにしましょう。

【水・死の床の慈善】

テモテへの手紙一 6 章 17 節「この世で富んでいる人々に命じなさい。高慢にならず、不確かな富に望みを置くのではなく、わたしたちにすべてのものを豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。」

コリントの信徒への手紙二 4 章 18 節「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」

ある人は生きている時ではなく、自分が死んだときに、遺産を神様にささげようと思っています。しかしこれは、言葉を換えれば、生きているときは自分のために使うと言っているわけです。エレン・ホワイトはこれを「死の床の慈善」と言いました。死の床の慈善は、生きている間の利己主義の言い訳にしかならず、そのような生き方を主は望んではおられません。

いつのまにか、不確かな富に望みを置くことのないように注意しなければなりません。そのためにも、目に見えない永遠のものに目を向け、第一とすべきです。しかし、富への誘惑は恐ろしい力を持っています。

箴言 30 章 8 節に、「むなしいもの、偽りの言葉をわたしから遠ざけてください。貧しくもせず、金持ちにもせず、わたしのために定められたパンでわたしを養ってください」と書かれてあります。このように祈ることは、私たちにとっても大切です。

【木・霊的な遺産】

今期の SS ガイドは、お金の管理について学んでいます、その中で常に忘れてはならない土台となるべき教えがあります。それは、すでに繰り返し学んできた通り、すべてのものは主のものであるということです。

詩編 24 編 1 節「地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、主のもの」

この視点で財産をとらえていくとき、自分の物をささげるという思いから、主が与えてくださったものをお返しするという思いに変わります。その上で、最後の時を迎えるときにあたっては、神様の御業のためにささげることによって、霊的遺産を残すことができます。